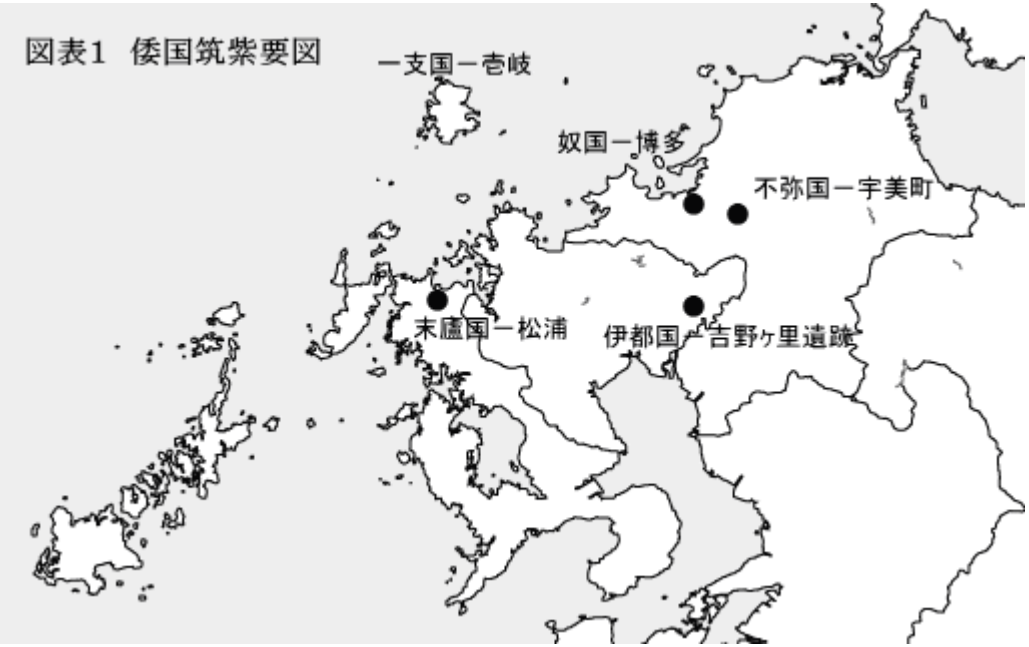
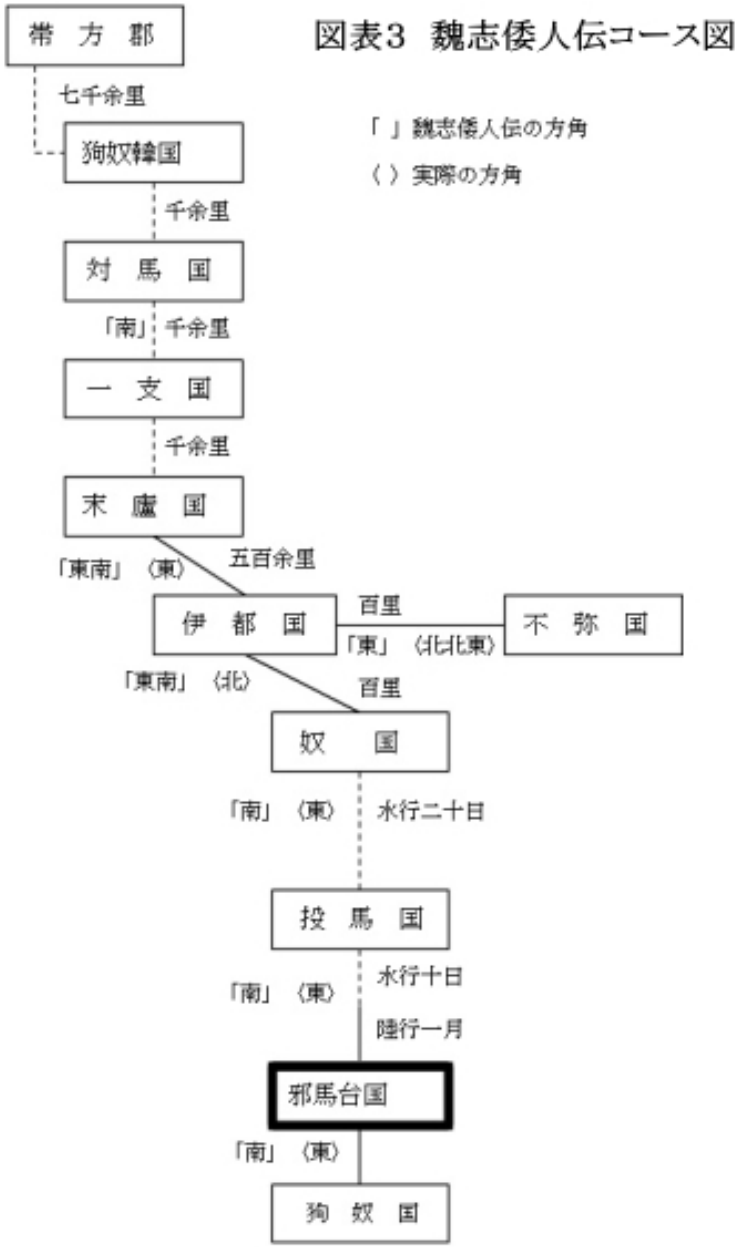
※図表を紙に印刷して参照しながら読み進めることをお勧めします。

目次

図表　図表２・４・５は省略
第一　初めに
第二　邪馬壹国の位置
第三　邪馬壹国とヤマト王権の比較（省略）
第四　騎馬民族征服王朝説（省略）
第五　ユダヤ征服王朝説（省略）
第六　紀年論（省略）
第七　倭国古代の歴史再現（省略）
第八　結び（省略）
参考文献（省略）


図表1　倭国筑紫要図
一支国－壱岐
奴国－博多
不弥国－宇美町
末盧国－松浦
伊都国－吉野ヶ里遺跡



図表3 魏志倭人伝コース図

「 」魏志倭人伝の方角

〈 〉実際の方角

第一　初めに

日本人の一人として古代史に関心を寄せてきた。特に、邪馬壹国の謎と天皇氏の出自については、学生の頃から関心があった。長年関心を寄せて思考した結果、その謎を解き明かしたと信じている。このたび思考の結果を著し、ヤマト王権創生の秘密をここにご報告する。この論文執筆に当たって採用した基本的方針を述べる。

「一般に古代人の神話・伝承というものが、その核心に史実をもっている場合が多いということが、考古学や民俗学の調査の結果、実証されてきて、日本の記紀の場合も例外ではあるまい、いや、むしろ、その所伝はそうとうに歴史性に富んだものであろうという考えが、優勢になってきているように見える。」（『騎馬民族国家』一六二頁）

私も、記紀などの記述の背後には、何らかの歴史的事実があると考えて、その歴史的事実をできる限り救う方針である。また、日本の古墳時代当時の中国は、日本と利害対立が無いので、魏志等の中国の史書は基本的に信頼できると考える。

古墳時代の時期区分としては通説に従う。

古墳時代前期が、三世紀後半から四世紀末まで。

古墳時代中期が、四世紀末から五世紀末まで。

古墳時代後期が、六世紀初頭から七世紀前半。

第二　邪馬壹国の位置

一

ご存じの通り、邪馬壹国の位置については、近畿説と九州説がある。近畿説は纒向遺跡を、九州説は吉野ヶ里遺跡を、卑弥呼の宮殿跡とすることが多い。次のような理由から、纒向遺跡を宮殿跡とする近畿説が正しいと考える。

（ア）「近年の考古学的成果、特に年輪年代学による新しい年代観により、畿内の大和地方での初期国家の成立が邪馬壹国成立と同時代の一世紀から二世紀頃までさかのぼるとの説が有力」（ウィキペディア「邪馬壹国」）であること。

（イ）「卑弥呼の遣使にちなんだと見られる景初三年、正始元年銘の三角縁神獣鏡が畿内を中心に分布、かつこれらが発掘される古墳の多くは年輪年代学等の結果により三世紀に築造されたと見られ、時代が合致すること」（ウィキペディア「邪馬壹国」）

（ウ）近年、纒向遺跡から大規模遺構が発掘されとともに、桃の種が大量に出土したこと。これを主題としたテレビ番組「ＮＨＫスペシャル」が説いたように、この桃の種は、卑弥呼が行った鬼道、すなわち道教の証拠であると考えられること。

（エ）奈良盆地はその地勢から開発しやすく、古くから開発が進み、その進んだ農業生産力の優位性により、倭国が最初に統合されたと考えられること。現在は、都道府県別農業生産力において低位にあるとしても。

二

邪馬壹国が近畿にあったとして、魏志倭人伝の邪馬壹国に至るコースを解釈してみる。私の考えるコースは図表３「魏志倭人伝コース図」のようなものである。

まず、帯方郡、狗奴韓国が朝鮮にあること、対馬の国が対馬であることは、問題ないと考える。一支国、末盧国、伊都国、奴国、不弥国は、図表１「倭国筑紫要図」のように考える。すなわち、語感から一支国が壱岐であると考えられる。同じく、語感と海港があることから、末盧国が松浦であると考えられる。一大率の居る伊都国であるが、吉野ヶ里遺跡であると考えられる。「ミヤコ」とあるように、邪馬壹国の九州お目付役の一大率が居るので、吉野ヶ里の大規模遺跡が相応しい。また、松浦で九州に上陸して、次に赴く地として、一大率の居る都邑が相応しい。伊都国の「伊」であるが、「コノ」や「カノ」という意味があり、伊都は「彼の都」ということではなかろうか。

末盧国(松浦市)から伊都国(吉野ヶ里遺跡)への方角は、魏志倭人伝では、「東南」となっているが、実際の方角は、〈東〉である。魏志倭人伝の方角を「　」内に、実際の方角を〈　〉内に表記する。

奴国であるが、博多と考えられる。博多を娜大津（なのおおつ）という。また、金印が志賀島から出土している。魏志倭人伝では、伊都国から「東南」とするが、実際は、〈北〉となる。そして、博多から出港して邪馬壹国へ向かったと考えられる。

不弥国は、宇美町と考える。魏志倭人伝では、伊都国から「東」とするが、実際は、〈北北東〉となる。

ここで、方角について考察を行う。末盧国(松浦市)から伊都国(吉野ヶ里遺跡)へは、実際は〈東〉なのに「東南」とされ、〈南〉への偏向が見られる。この偏向は、「『倭人伝』のなかに「その道里を計るに、まさに会稽・東冶の東にあるべし」「倭の地を参問するに、海中洲島の上に絶在す。あるいは絶えあるいは連なり、周旋五千余里ばかりなり」とあり、会稽は浙江省、東冶は福建省であるから、倭はその東の海上にあり、つまり北九州から南へ琉球・台湾あたりへのびる列島だと考えていたらしい。」(『神話から歴史へ』四三頁）ことから、生じていると考えられる。邪馬壹国が〈南〉にあるという思い込みが魏の使節にはあったのである。

さらに、この偏向は拡大し、実際は伊都国から〈北〉となる奴国を、「東南」とし、実際は伊都国から〈北北東〉にある不弥国を、「東」としてしまうのである。九州内陸を移動するうちに方角を見失ったとも考えられる。また、邪馬壹国の役人が邪馬壹国の位置を隠すために、この偏向を助長させたとも考えられる。

この偏向に従い、〈北〉を「東」とすると、実際の〈東〉は「南」となる。魏志倭人伝は、奴国から「南」へと向かったとするが、実際は〈東〉へ向かったこととなる。奴国から「南」へ向かったと言うが実際には〈東〉に向かったのである。このことと、「南、投馬国に至る水行二十日。」とあることから、瀬戸内航路を進んだと考えられる。

投馬国とは、針間の国、すなわち播磨の国と考えられる。「馬」は、「間」の当て字である。そして、「投」には投宿するという意味があり、投宿した針間の国ということであろう。

投馬国から、「水行十日陸行一月」して、邪馬壹国に着く。播磨国から、大阪湾を進んで、河内平野に上陸し、大和の国に入ったと考えられる。

この偏向に従い、〈北〉を「東」とすると、実際の〈西〉は、「北」となる。「女王国より以北、その戸数・道理は得て略載すべきも、その余りの旁国は遠絶にして得て詳かにすべからず。」と、女王国より「北」すなわち実際は〈西〉にある中国地方、四国地方の国々を記載しない言い訳をしている。

「次に斯馬国あり、……これ女王の境界の尽くる所なり。」までは、女王国から「南」の国々、すなわち実際は〈東〉の国々、東国について述べている。

その境界の「南」、実際は〈東〉にあって女王に属しない狗奴国とは、蝦夷の国であろう。

ウィキペディア「邪馬壹国」が指摘する畿内説の弱点については、次のように考える。

「倭国の産物とされるもののうち、鉄や絹は主に北九州から出土する」点は、一大率により、九州は支配されており、邪馬壹国は九州の産物を入手できた。

「「魏志倭人伝」に記述された民俗・風俗がかなり南方系の印象を与え、南九州を根拠とする隼人と共通する面が指摘されている」点は、ヤマト王権により、民俗・風俗が変化したと考える。

「「魏志倭人伝」の記述は北九州の小国を詳細に紹介する一方で、畿内説が投馬国に比定する近畿以西に存在したはずの吉備国や出雲国の仔細には全く触れられておらず、近畿圏まで含む道程の記述とみなすのは不自然。」点及び「「魏志倭人伝」を読む限り、邪馬壹国は伊都国や奴国といった北九州の国より南側にある」点は、既述のように魏志倭人伝を解釈することにより、解消される。

以下省略

有料版をご購入ください。